〈寺宝報告書〉

福通寺 木造弘法大師坐像について

朝日山 福通寺

弘法大師坐像　一軀

木造　古色　玉眼
像高　二七・二cm
室町時代　文明三年（一四七一）

真言宗の開祖、弘法大師空海の肖像である。現在本像は、福通寺本堂北側の須弥壇上厨子内に安置されている。

本像は、法衣、袈裟を着し、左手を膝上において念珠を執り、右手は胸前で捻って五鈷杵を握り、牀座に坐した姿で表される。この像容は、弘法大師の高弟、真如親王が描いたとされる高野山御影堂本尊の図像、真如親王様に基づくものである。

構造はヒノキの寄木造り。玉眼嵌入。頭体幹部を前後二材より彫出し、内刳りのうえ頭部は割首とする。内刳りの際、前半材下端には腹部から地付きに達する像心束を、また前後材をつなぐために両腰辺に設けた雇い枘の周囲を束状に彫り残す。肩先の両体側部、両脚部（横一材）に別材を矧ぎ、それぞれ内刳りを施す。両袖口は脚部上に各別材を矧ぎつけ、手首先を挿し込み矧ぎとする。さらに裳先、袖先などに小材を矧ぎつける。

像内体部背面に銘記があり、「仏所卿公院増」がその子息の「大輔公」と「宰相公」とともに造立して、「郡榮山朝日寺常住本尊」（「常住本尊」は住持職本坊本尊の意か）として文明三年（一四七一）二月二十一日に寄進したことが知られる。本像は衣文表現や構造の特徴などから中世後期の院派の作と考えられ、銘記の院増は院派の仏師と考えて間違いないであろう。院増はその作例を確認できないが、子息「大輔公」は、文明十三年（一四八一）の京都府京丹後市仲禅寺仁王像の作者「大仏師大輔法眼院勝」にあたる可能性がある。また石川県珠洲市法住寺金剛力士像が像内納入文書から享徳二年（一四五三）の院勝・院超の作と判明しており、この院勝・院超が兄弟とすれば、「宰相公」は院超にあたるという仮説も考えられる。

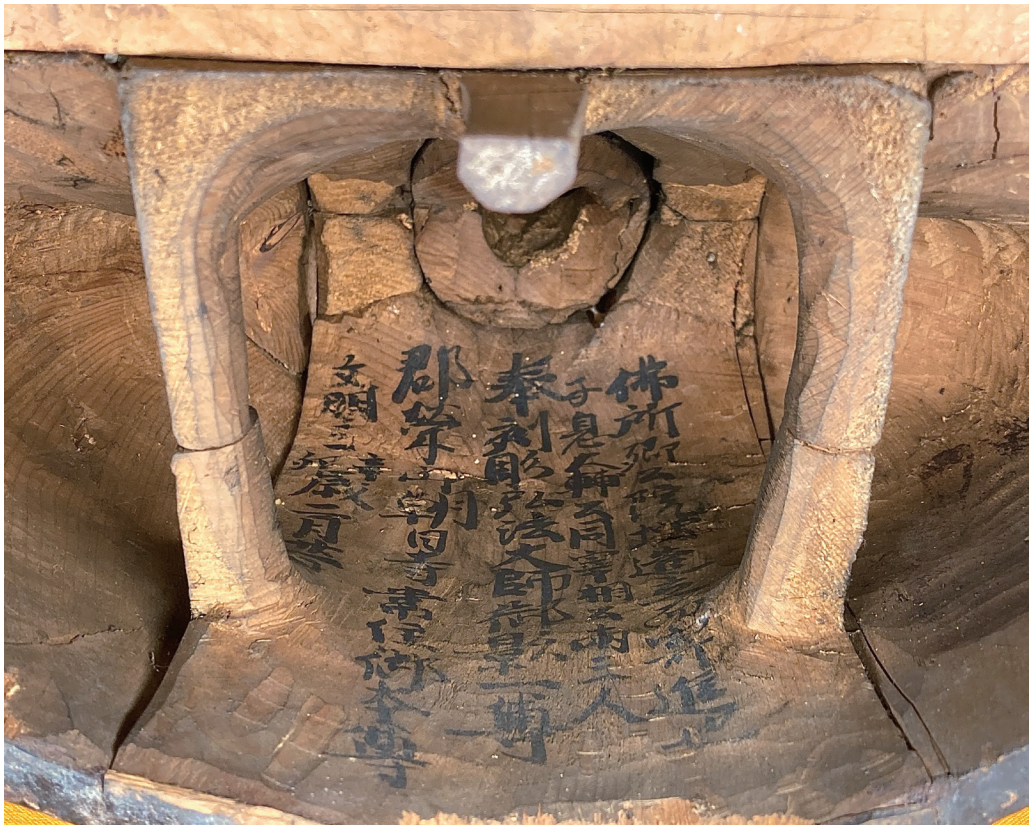
像内銘にある「郡榮山朝日寺」は、朝日観音の中世以前の寺名と考えられており、東寺百合文書の「越前国朝日寺東寺御修造奉加人数事」（文安二年〔一四四五〕八月九日付）や「東寺修造料足越前国寺々奉加状」（文安二年九月日付）などに「朝日寺」の名を見ることができる。このうち「奉加人数事」には、当時の朝日寺に住した法印良祐以下十一名の僧侶の名が記されており、それから二十六年後の弘法大師像寄進に関係した者も、その中に含まれているかもしれない。

朝日寺は戦国時代末期の天正二年（一五七四）、越前一向一揆により焼亡したとされ、その後寺勢は回復せず、江戸時代以降は朝日村・内郡村の村堂である「朝日観音堂」へと体制を変えて護持されるようになった。観音堂の寺務を司るのが別当の福通寺（教王護国寺観智院末。「長福院」とも称した）であり、現在に続いている。なお福通寺の山号は、江戸時代には「郡榮山」を称しており（現在は「朝日山」）、「郡榮山朝日寺」の後裔としての地位を示しているものと思われる。

各部の寸法（cm）

像高 二七・二　頂～顎 九・六　面幅 六・七　面奥 九・〇　耳張 七・六
胸奥 一〇・五　肘張 二二・四　腹奥 一一・四　袖張 二九・六
像奥 二三・二

弘法大師坐像



弘法大師坐像　像内体部背面墨書

佛所卿公院增造立而寄進也
子息大輔公同宰相公両三人
奉刻彫弘法大師御影一尊
郡榮山朝日寺常住御本尊
文明三辛卯歳二月廿一日

本稿の執筆にあたり、山本勉先生（清泉女子大学名誉教授・東京国立博物館名誉館員）よりご教示賜りました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

〈寺宝報告書〉
福通寺 木造弘法大師坐像について
令和二年六月二十一日発行
編　者　福通寺住職 藤川明宏
発行者　朝日山 福通寺
福井県丹生郡越前町朝日七番六一号
電話　〇七七八－三四－〇六二一
fukutsuji@icloud.com